一

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

筆者は「子ども哲学」という活動を、全国の教育機関や図書館で行っている。その内容は、「哲学的なテーマについて、子ども同士、あるいは大人も一緒になって考え、語り合う」というものである。次の文章は、その活動の成果を元にして書かれている。

対話とは、あるテーマについて自分の考えを提示しあい、相互に検討し、吟味するという過程である。ひとつのテーマや問いに対して、それぞれが意見を出し合うときに、すぐに明らかになるのは意見の［X］である。子どもの哲学をはじめて行った子どもの感想としてもっとも多いのが、「いろいろな意見があるので驚いた」「普段からよく知っている友だちが、あんなことを考えているとは思わなかった」というものである。比較的に文化的・地域的な背景が均一である小学校で行っても、こうした感想が得られる。さらにさまざまな背景を持った人々の意見ならば、異なっているのが当たり前である。

哲学対話の特徴は、自分の意見が皆からの検討に付される点である。通常の話し合いでは、人はどうしても持説に固執してしまう。とくに自分のさまざまな行動の前提となっているような信念や、自分が常識と思っているような信念についてならば、なおさらである。普段はこのような自分の深いところにある考えを簡単には披露しないし、かりに披露してもそれを検討し合うことはしない。大人の方が、子どもより自分の意見に固執しがちであるし、人の意見を聞こうともしないことがある。

しかし哲学対話ではあえて持説を検討し合うことを目的としている。ディベートが持説を擁護して、相手を説得することに目的があるとすれば、哲学対話で重要とされるのは、相手の話を傾聴して、そこで得られた視点や立場から自分自身の考えを検討し、必要とあればそれを変える姿勢でいることである。これが哲学対話と他の対話との違いである。哲学とは、自分の前提や習慣、信念を自己吟味し、場合によっては自己変更する試みだからである。

このような自己吟味の姿勢を保つには、新しい考えを作り出すという気持ちで対話に参加することが大切である。［A］こ

の気持ちを対話の最初から持つことは難しいかもしれない。皆で対話をするときには、テーマや問いが設定される。そして、誰かがそれについての意見を言う。他の人がそれとは異なる意見を言う。そしてそれぞれの意見に対して、質問が出され、対立する意見との比較がなされ、批判的な吟味がなされる。ひとつの意見は、さまざまな角度と視点から、多様な立場から検討され、広い文脈と背景の中に置き直される。思考は、ある前提に立って議論を進めようとする。対話は議論の前提からさらに引き下がろうとする。思考は進行的で、対話は遡行的*である。

議論には、ズームインとズームアウトという過程があると言える。ズームインとは、あるテーマや問いを、さらに詳細にしばしば具体的に論じていく過程である。ズームアウトとは、あるテーマや問いを広い文脈や枠組みに置いて、鳥瞰図*を得ようとする過程である。ズームインから得られる議論は、問題解決的であり、専門的で技術的になっていく。他方、ズームアウトから得られる議論は、前提を問い直し、視野を広げて全体的になっていく。哲学の議論は後者を重視する。それはできる限り広い範囲の多様な視点から、問題を考えようとする態度である。対話に参加したものは、自分の意見が自覚のないままに狭い前提や限られた文脈から出ていることを知り、他の考え方の可能性もあることを理解する。[1]こうして、哲学対話によって、参加者は自己束縛を解いて自由になる。それは他者との出会いにより、自分が自分に距離をとっていく過程である。

こうした対話では、問いやテーマに対して解決が出されるというよりは、その問いやテーマ、出される意見に対して、他の問いやテーマ、意見が関連づけられる。子どもの哲学の例を使ってみよう。「偉いってどういうこと」という質問が子どもから出される。すると、具体例が出されながら、「偉い」という言葉の定義が試みられる。「社会的地位が高い」、「評価に値する」、「努力した」、「すごい」などといった複数の概念と比較対照がなされる。具体的な人物名や振る舞いの事例が出され、その人やその行動が「偉い」という形容に値するかどうかが論じられる。これらの事例は単なる寄せ集めなのか、それとも「偉い」には共通性があるかどうかが検討される。褒め言葉としては、自分よりも目上や年上の人には「偉いね」とは言わない、などといった、言葉が使用される文脈や場面も論じられる。さらに、ある人から、ある地方では、「えらいやっちゃな〜」とか「えらいことしてくれたな」といったように、批判あるいは①ヒタンの表現として「えらい」が使われることがあると②シテキされる。

これほど多様な定義のコウホ③が出されると、「偉い」についてひとつの決定的な定義に至ることは難しいだろう。さらに「地位が高いとはどういうことか」「努力したと認められるのはどういう時か」「すごいとは何か」とか、「なぜ人は人を褒めるのか」「なぜ人は評価するのか」とか、「そもそも、なぜ偉いかどうかが気になるのか」といったメタレベル2に問いは移行していく。ひとつの問いは無数の線によって他の問いとつながっており、最初の問いに答えるには、すべての問いに答えなければならない。

B 、このような哲学対話では何が行われているのであろうか。それは意味づけである。「偉い」という概念は、対話によって、他のさまざまな概念との関連が示され、それが用いられる文脈や場面が明らかになっていく。関連した概念もさらに他の概念との関連が示されていく。こうした関連づけは、意味づけと呼んでよい。ひとつのテーマや問いが、他のテーマや問いのネットワークの中に、水平的に階層的に、時間的に空間的に、位置づけられていく。これがズームアウトする議論の成果である。

対話では、自分の意見も全体の中に位置づけられ、意味づけられていく。単に私の意見の真偽や正否が検討されるだけではない。他の意見との間でどのようなポジションになるのか、どのような前提に立ち、どのような帰結をもたらすものなのかが徐々に明らかになっていく。

人は自分の意見にしばしば固執している。自分の意見が批判されることは、自分が否定されているかのように感じるかもしれない。それゆえに、人は、自分が傷つき、他人を傷つけることを恐れて、議論を避けようとする。議論することは、他者と戦い争うことであるかのように思って、主張が正しいかどうかよりも、ときにダキョウ④し、ときに付和雷同し、ときに多数派について議論を終了させようとする。声が大きいだけで正しくない意見でも追随する。3戦争よりは圧政の方がましだというわけである。

しかし対話では、さまざまな意見が多角的に検討されることにより、あらゆる意見が相対化される。ここで相対化されるとは、意味づけられるのと同じことである。そうして私の意見は、疑問や反論にさらされながらも、一定の位置づけ、すなわち意味

づけを得る。多くの人が対話に参加すればするほど、全体が理解されていく。それは、自分の意見が位置づけられることであると同時に、自分自身がグループのなかに存在する意味を見いだすことでもある。参加者のグループが分かち合うのは、この意味の全体像である。哲学対話では、⑤チュウショウ概念を振り回すのではなく、参加していくことによって全体の理解が生じてくる。［C］、対話には、参加者を真にグループに包括していく働きがある。

哲学対話で行われるのは、問題解決ではなく、問題の意味づけである。意味づけとは、価値づけでもありうる。価値とは優先順位のことである。あるテーマが他のテーマとの関連で優先されるべきであると判断されれば、そのテーマの価値が理解されたのである。

では、対話の終着点、あるいは目標とは何であろうか。意味の全体像を得ることだろうか。そう言えるが、より多様な観点や視点から発言がなされることによって、文脈や枠組みがさらに広い範囲へと広げられることによって、［D］さらにメタレベルの議論がされることによって、意味の全体像はむしろ広がっていき、最終的な全体像など得られそうにない。であるならば、対話の目標をどこに置けばいいのだろうか。

それは、新しさの発現である。新しさとは新しい組み合わせのことである。あるものは、これまでとは異なった関連性や文脈、枠組みの中に入ることによって新しさを得る。ある問いが新しい枠組みに置かれて、これまでとは別の展開を見せること、あるテーマが異なった人により異なった文脈により論じられること、自分の考えが意外な関連性のもとに置かれてこれまでとは異なった価値づけがなされること、これらが新しさの発現である。グループでの対話が新しい意味と目的を創発して、個々人にとってもそれまでとは異なった考えを持てる場所となる。各人が自分自身を更新して、それまでの自分から自由になることができるならば、その対話は成功したのである。哲学対話には、あらかじめ決められた到着点も方向性もない。唯一重要であるのは、新しさである。新しい存在を生み出すことである。

対話は、新しさを生み出すことが目的であるかぎり、その過程には終わりがない。それは更新することそのことに意義がある、と言い換えてもよい。ジョン・デューイは、教育の目的とは、成長そのものであると主張した。教育には到達地としての

目的などない。固定された目的などは存在せず、人々の間で目的が一致するわけでもない。「どこへ向かっての成長か」という問いそのものが、成長の概念に反するのである。というのは、成長とは運動だからである。成長とは、さまざまな人間との接触により、他者との交流に身を開き、いっそう豊かな経験、さらに新しい経験をしていくことである。4 成長の過程が、次の段階を自生的に生み出すのである。対話の目的は、対話の過程の外から与えられてはならない。いや、対話には特定の目的地があってはならない。もし対話の目的があるとすれば、新しさを追求すること以外ではない。それは、地上に新しい生き物を生み出す共同行為なのである。

（河野哲也『人は語り続けるとき、考えていない　対話と思考の哲学』による）

【注】 **＊遡行的**＝さかのぼること。　**＊鳥瞰図**＝ここでは全体を見通すこと。

問一　――線部①～⑤のカタカナを漢字に書き改めよ。

問二　空欄［X］に当てはまる語として、最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア　画一性　　イ　多様性
ウ　独創性　　エ　普遍性

問三　空欄［A］～［D］に当てはまる語として、最も適切なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えよ。

ア　では　　イ　しかし
ウ　あるいは　　エ　それゆえに

問四　――線部1「こうして、哲学対話によって、参加者は自己束縛を解いて自由になる」とあるが、それは具体的にどうなることか。説明せよ。

問五　――線部2「メタレベルに問いは移行していく」とあるが、「メタレベル」な問いとはどのようなものか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア　自分の説を深めて強化することによって、どのような反論にも耐えられるもの。
イ　他の問いと関連付けられることによって、全体にかかわる広く多様な視点にわたったもの。
ウ　問題点を洗い出すことによって、解決しなければならない問題がはっきり区別できるもの。
エ　常に新しさを追求することによって、これまで誰も考えてこなかった概念を見つけだすもの。

問六　――線部3「戦争よりは圧政の方がましだ」とあるが、「戦争」と「圧政」とは議論においてどういうことを意味する言葉か。解答欄に合うようにそれぞれ説明せよ。

問七　――線部**4**「成長の過程が、次の段階を自生的に生み出すのである」とあるが、それはどういうことをいうのか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア　より多様な観点や視点に気づき、自分自身が更新されると、新しい見聞や行動につながっていくということ。

イ　対話の目標をあえて見失うことで、過程の中から新しい問題点を導き出すことができるようになるということ。

ウ　あるテーマや問いを詳細に論じていくことで、問題を解決することができれば、そこから新しい問題に気づけるということ。

エ　対話の成功にこだわるのではなく、失敗することを恐れずに、強い意見に従わないことから、新しい議論の仕方がわかるということ。

問八　この文章において筆者は「哲学対話」と「他の対話」との違いをどのように述べているか。解答欄に合うようにそれぞれ説明せよ。